

THE
JAPAN
INTERIOR
DESIGNERS'
ASSOCIATION

JID no. 49.50

1971. Aug. 1 st.

昭和46年8月1日発行

目次

剣持 勇兄をしのぶ.....	1
剣持 勇氏のあしあと.....	2
中部支部発足.....	5
特集・協会のメリットは何か.....	6
だんわしつ.....	9
組織図・新入会員紹介・編集後記.....	10・11・12

剣持 勇 兄 を し の ぶ

理事長 豊口克平

剣持 勇兄

君の死を惜しむ 君の死を悲しむ

君の死を嘆く 君の死をうらむ

私たちがどれだけ君の仕事への情熱と斗いに励まされ、どれだけその才能を羨み、どれだけその指導力を頼りにしていたか君はそれをよく知っていたのに。いつも苦り切った顔で私達をにらみつけ、時にはあわれみの眼で悲しそうな顔をし、時には激しい言葉でののしり、私達を途方にくれさせた。

君は私達の歩速ののろさに我慢がならなかったのだろう。君はいらだちに心身を疲れさせ、そして孤独の中で仕事に夢中になった。

急ぎすぎた君がいけないのか、歩速のおそすぎた私たちが愚鈍だったのか、私にもよくわからない。永久に残るであろう世界に誇るべき君のデザインや作品、そしてブルーノ・タウトの指導を受けて以来の日本を愛し、伝統をいつくしみ、豊かで美しいやぶての社会を夢みながら、無数の指導を工業界に与え、子弟を育ててきた君の業績を私たちは永遠に忘れることはないだろう。

君は余りにも世界のデザインを知りすぎて、日本のデザイナーの現状やその貧相な環境に我慢がならなかったのだろう。

いますこし待って欲しかった。死ん

ではいけなかったのだ。これからが本当に突撃するときがやってきていたのだ。産業公害、生活環境の革新に日本いや世界が目ざめ、デザインの真価が示され、理解される日が近づいていたのだ。

どうして君はそれを待てなかったのだ。大いなる指導者、実践者を失った私たちは君の死によって茫然としている。

同志を失い、友を失い、ただただ悲しい。

どうかもう腹を立てずに静かに眠ってくれ。疲れたらう。

46年6月9日

(社)日本インテリアデザイナー協会
および友人代表 豊口克平

以上は私の彼の霊に捧げた葬儀の際の弔辞である。永い40年もの間、同じ仕事を天職と心得、時には議論もし、時には慢談、Y談に興じ、時には酒をくみ交し、時には旅をともにした仲であれば、こんな短い弔辞でこと足るわけではない。

しかし昔の彼と最近の剣持とは別人のような気がしてならなかったというのが実感である。

〈正しいものへの追求〉の時代の彼は〈美〉を求めながらも論理的で、その中に人間らしい余裕が見られたが、やがて〈美しきものへの追求〉にひたむきになったころから、その二面性が逆な立場におかれて、芸術家特有の〈個性〉への埋没、そして創造への懐

悩に苦しみだしたかに見え、感情的起伏の波が大きくゆれだし、その言動にもよくそれが現われた。

それだけに彼を芸術家として尊敬する人も多く、また彼のさう慢さに非情を感じてなじる人も少なかったことも事実である。しかし彼は彼らしい流動の中で正直に生き抜こうとして生きた男といえよう。

アスペン(米国)の世界デザイン会議に鯉のぼりを立てて拍手された彼。世界を股にかけて渡り歩く彼、知名の内外の芸術家、建築家、デザイナーと知遇を求める彼、車中でも農家でも見ず知らずの爺さんや娘さんに親しく話かける彼、土俗や民族的作品を愛し、蒐める彼。一流の料亭の美女と語り、粗末な場末の酒場で女と談笑する彼。そして立派な作品をものにし、鮮かな文章を書き、鋭い講演に若者の心をとらえることのできる彼。

どれが彼の真実なのか、演出なのか、実力なのか——私達のよくわからないままに彼は死を求めて去っていった。印象の深い、永遠に記憶から去らない傑物である。ある意味では人生に対し、社会に対し、仕事に対し〈どん欲〉極らない男だったのかも知れない。そして彼自身の多様な心の動きに彼自身疲れ果ててしまったのかも知れない。一度離れていった協会に彼を引戻してから3年になるだろうか。彼も孤独の世界から同志の世界へ返ってきてくれたので私は大いに期待をかけていたのだが、全く残念でならない。

剣持 勇氏のあしあと

けん
剣

もち
持

いさむ
勇

明治45年1月2日生

本籍地 東京都杉並区永福町2-441

現住所 東京都杉並区永福町2-17-18

職 歴

昭和7年3月 東京高等工芸学校（現千葉大学）木材工芸科本科卒業

昭和7年4月 商工省工芸指導所入所

昭和7年6月 助手を命ぜられる

昭和17年10月 住宅家具及び設備の研究に関する事務取扱を委嘱される（商工省）

昭和19年1月 任工芸指導所技師（内閣）叙高等官七等

昭和19年2月 叙従七位（宮内省）

昭和19年6月 兼任軍需技師（内閣）航空兵器総務局飛行機課勤務を命ぜらる（軍需省）

昭和21年3月 叙高等官六等

昭和21年4月 任商工技師 叙二級（勅命第193号）工芸指導所勤務を命ぜらる（工芸指導所）

昭和21年5月 東北支所勤務木工課長に任ぜらる（工芸指導所）

昭和21年7月 商品標準課委員会幹事を命ぜらる（商工省）

昭和22年8月 木工部長を命ぜらる（商工省）

昭和23年8月 工業技術庁工芸指導所東北支所木工課長を命ぜらる（工芸指導所）

昭和25年2月 研究部第一課長に任ぜらる（工芸指導所）

昭和26年4月 技術部第一技術課長に任ぜらる（工芸指導所）

昭和27年 毎日新聞工業デザイン

賞審査員を委嘱さる（今日にいたる）

昭和27年3月 海外工芸事情研究のためアメリカ合衆国へ出張を命ぜらる

昭和27年4月 政令第93号により産業工業試験所意匠部勤務となる。

昭和27年4月 意匠部長を命ぜらる（工業技術庁）

昭和27年8月 工業所有権制度改正審議専門委員に併任さる（特許庁）

昭和28年6月 米国に出張を命ぜらる（通商産業大臣）

昭和29年6月 日本ユネスコ国内委員会（教育文化活動小委員会）調査委員に併任さる（文部大臣）（今日にいたる）

昭和29年12月 12級1号俸を支給さる（工業技術院）

昭和30年6月 人事院細則9—8—2第24項第3号により12級2号俸を支給さる

昭和30年6月 辞職を承認される（工業技術院長）

昭和30年7月 剣持勇デザイン所を設立す

昭和31年 毎日新聞産業デザイン選考委員を委嘱される（今日にいたる）

昭和32年2月 株式会社剣持勇デザイン研究所を設立す

昭和33年 ブラッセル万国博覧会日本館に対し前川国男氏等と金賞受賞

昭和38年 第9回毎日産業デザイン賞受賞

昭和39年 ニューヨーク近代美術館20世紀デザインコレクションに作品「籐丸椅子」選定さる

昭和44年 イタリアアイエロドーム

昭和45年

昭和46年5月

団 体 歴

昭和25年4月 新制作協会会員となる

昭和27年10月 日本インダストリアルデザイナー協会理事となる（昭和30年3月まで）

昭和28年10月 日本デザインコミッティ会員となる。国際委員を委嘱さる（昭和42年4月まで）

昭和33年11月 日本室内設計家協会（現(社)日本インテリアデザイナー協会）理事（昭和37年3月まで）

昭和34年4月 日本室内設計家協会理事長（任期1年）

昭和34年9月 東京オリンピック組織委員会デザイン委員会委員（昭和40年6月まで）

昭和42年3月 札幌冬期オリンピック大会組織委員会デザイン委員会委員を委嘱さる（今日にいたる）

昭和42年4月 日本デザインコミッティ理事となる（今日にいたる）

昭和44年5月 社団法人日本インテリアデザイナー協会理事（今日にいたる）

昭和44年5月 日本万国博協会ディスプレイ顧問（今日にいたる）

昭和45年4月 財団法人日本産業デザ

剣持 勇氏のあしあと

イン振興会常任理事
(今日にいたる)

日その他

昭和46年6月3日 死亡

公 職 歴

昭和33年9月 意匠奨励審議会委員
(任期2年)(通商産業省)

昭和33年10月 デザイン奨励審議会委員(通商産業省)(中途昭和36年10月1日より昭和43年3月31日迄欠)として今日にいたる

教 職 歴

昭和34年4月 多摩美術大学講師を委嘱される(昭和39年3月まで)

昭和39年4月 多摩美術大学教授(任期4カ年)

昭和40年4月 東京大学講師(任期2カ年)

昭和42年4月 早稲田大学理工学部建築学科講師(今日にいたる)

著 作 歴

1. 規格家具 相模書房

1. フリースペース

(雪のリビング・座具としての畳・マンションの寝室・ハンモック・空飛ぶラウンジ)

週刊朝日

1. 日本美術掘

(徳島の水がめ・日向の守護神像・箱棟の飾の彫刻・樺材工・高山祭の屋台・くりの衝立・絵馬(神馬図)宮津のうら盆地蔵)週刊朝

賞 罰

昭和19年2月 叙従七位

功 績 調 書

本籍地 東京都杉並区永福町二丁目17-18

現住所 東京都杉並区永福町二丁目17-18

現 職 株式会社 剣持デザイン研究所

取締役社長 剣持 勇
明治45年1月2日生

1. 性 行

氏はわが国におけるインテリアデザイン界のパイオニアとして常にその先端に位置し、創作活動に精魂を傾けた作家であった。それは新鮮で緻密な感覚、国際的水準に立つ知性、たゆまざる情熱、不撓不屈の意志の持ち主であることを示したものである。又、誠実で親切な人柄、明るく屈託のない性格は良く衆望を集めて、デザイナー団体の組織化を促進し、周到的計画性と果敢な指導力はその運営にもあらわれている。

2. 事 績

(1) 近代デザインの先駆者として我が国のデザイン水準を国際水準まで高めた功績

氏のデザイン活動は、戦前商工省工芸指導所在籍当時より、伝統的地方木工工芸の技術指導に当り、地方産業の発展に尽力したが、国際的視野にたっ

た近代デザイン活動を展開したのは、主に昭和30年剣持デザイン研究所の設立以後に求めることが出来る。

氏がこのようなデザイン活動を始めた時期はわが国デザイン界の黎明期で、一般にその重要さが充分には認識されなかった時期であったが、その時点で早くも世界のデザイン界の動向を見透し、近代デザイン運動の一環として日本近代調デザインを主張し、その先頭に立って活躍した。

これらのデザインは、日本が近代工業国として発展する途上でデザインされたものであり、成型合板プラスチックなど、次々と生れた新材料を如何にデザインの的に処理するかが課題となった時であるが、氏はその原型ともいえるデザインを次々に行ない、みづからの作品で解答を示した。

又、このような新しい技術を追求しながらも、一面では日本の伝統技術を愛し、調査育成に努力し、現代人の生活空間の中での調和をこころみた、インテリアデザインを行っている。

ジャンボジェット機のインテリアデザインは、その代表ともいえるであろう。氏の作品は主として、インテリアデザイン及び家具等のプロダクトデザインであるが、今日これらの分野のデザイン水準が世界的水準に近づきつつあるのは氏の功績に帰するところが大きい。

(4) インテリアデザインの啓蒙向上に尽した功績

氏のインテリアデザインはホテル・公共建築・住宅・事務所・展示会場・航空機等各方面にわたり、非常に多くの作品を残している。昭和33年戦後日本が初めて参加したブラッセル万国博覧会には、前川国男・山城隆一・渡辺義雄の諸氏と協力して日本館の内部設計を担当している。日本人の手と機械というテーマの下に設計された日本館は、伝統工芸と現代工業の両極を綜合

したものとして諸外国の注目するところとなり、金賞を受賞した。その後、氏は昭和30年中期以降の高層耐久建築の普及の中において、近年のわが国の代表的建築として評価されている東京ヒルトンホテル、香川県庁舎、京都国際会議場・京王プラザホテルを担当し、不燃化時代における新しい手法を次々と考案し、建築設計におけるインテリアデザインの重要性を広く認識せしめた。昭和38年にはこれら一連のデザイン活動に対して、毎日産業デザイン賞が授与されている。

(d) インテリアデザインを通じ国際的行事に参加した功績

国家的事業であった東京オリンピックにあたっては、デザイン委員会の委員として活躍したばかりでなく、建築の丹下健三氏と共同で代々木屋内競技場の設計に当り主として貴賓室その他のインテリアデザインを担当した。日本万国博覧会では、ディスプレイ顧問としてディスプレイデザインの指導にあたるほか、サイドファニチャーの設計をGKインダストリー等と協力して行ない、そのすぐれた総合美は都市環境を美化するストリートファニチャーの曲型として注目され、昭和45年度毎日産業デザイン賞を受けた。また昭和43年には日航B-747（ジャンボジェット機）の内装設計にあたり、日本万国博覧会を期に就航し現在世界の空を飛びまわっている。このデザインも、現代日本の代表的作品として、ジャンボジェット機のビック5に入り、（社）日本インテリアデザイナー協会、昭和46年度協会賞も受賞した。

(e) 新技術の開発を含むプロダクトデザインの近代化により産業開発に尽した功績

(1) 一般木製家具分野の功績

家具等の工業デザインの分野では、工芸指導所における規範原型の研究（昭和8年）をもとに、規格家具（相模書房刊）を著し、日本における家具の標準寸法の確立と普及に尽力した。

又、昭和23年には、木材曲面成型法をもとに高周波熱利用法に注目してその実用化に成功し、成型分板の椅子を完成させた。

この成型合板の手法は、家具産業の工業生産化を促進させた上で重要な意義があり、造型的にも旧来の木製家具の形態を一新させた。曲木家具ではとくにローコストのスタッキングスツールを設計し、すでに15年の永きにわたって製作され、広く国民生活の中で利用されてしまっている。

(2) 事務用家具の分野の功績

事務用家具では、事務能率の向上と事務環境の調和を目的とした人間工学的な調査研究を行ない、その成果として、旧来のオフィス家具の概念を打ち破り、機能的であたたかくカラフルなCFグループIを開発し、労働環境の改善に努めた。

この作品は建築家達の注目を集め、これから量産に移る段階にある。

(3) 籐家具の分野の功績

籐家具の分野は、今まで職人的な感覚による生産であったが、氏は治具による生産手法を開発指導し、手工芸的量产化を計った。このような技術改革を前提とした氏の設計になる籐丸椅子は、ニューヨーク近代美術館20世紀デザインコレクションに選ばれ、日本を代表する世界的水準の家具として、永久保存の部類に入っている。更に家具以外の工業デザインの分野でも農機車・オルガン・ピアノ等々枚挙にいとまがない。

3. デザインの啓蒙運動によってデザイナーの社会的地位の向上に尽した功績

氏は作品活動ばかりでなく、デザイン運動の面でも種々の業績を残した。その最初は昭和25年新制作派協会建築部会会員となった頃にはじまる。当時家具等のデザインは、せいぜい応用美術の一分野と考えられ、純粋美術より低く見られていた。このような中で建築部会内に家具部門を設け、作品の公募を行ったがこれはデザイン活動を芸術活動と対等の一分野として、確立した点で意義が大きかった。

その後昭和27年にはアスペン第3回国際デザイン会議に出席したのをはじめとし、数回にわたり欧米を訪問し、ジョージネルソンやイームズをはじめ、世界一流のデザイナーとの交友を深めて、産業工芸試験所に招へいするとともに、昭和28年には、日本デザインコミッティー国際委員となり、これらのデザイナーの作品を日本に紹介する一方、トリエレナーレ展（イタリア）イエロドムス展（イタリア）等に日本の作品を出品し、国際交流につくした。又昭和27年には日本インダストリアルデザイナー協会（現社団法人）昭和33年には日本室内設計家協会（現社団法人日本インテリアデザイナー協会）の結成を提唱し、その理事又は理事長として、デザイナーの社会的地位と技術水準の向上に寄与した。

4. 政府委員及び団体役員としての功績

氏は産業工芸試験所在籍時から、工業所有権制度改正審議会専門委員（昭和27年）日本ユネスコ国内委員会調査委員（昭和29年）を併任し、デザイン行政にも関与したが、昭和33年9月には、意匠奨励審議会（現デザイン奨励

審議会)委員に就任し、現在においてもその要職にあり、デザイナーの代表として通商産業大臣の諮問を受けデザイン行政の一本化をめざしたデザイン課の設置や、Gマーク制度の発足があり、これらに参与している。

5. 教育者として後進の指導育成に尽力した功績

デザイン教育の面では、昭和34年多摩美術大学デザイン科講師、39年には教授に就任したのをはじめ、東京大学講師(昭和40年)早稲田大学理工学部建築科講師(昭和42年)等にもなり、後進デザイナーの教育にあたった。

又、自己の研究所に東南アジア研究生が来訪し留学等の便宜を計るなど、その指導にもあたっている。

中 部 支 部 発 足

本支部が協会自体の未開発地域に対する新たな要望によって、支部設立が理事会に於て企図され、その準備が初められたのは昨年9月の初頭、樋口理事が来名され、会員玉置勇一氏及愛知県産業貿易館の若園晃氏と私が加つてのことであつた。その後会員として適当と思われる人々へ呼かけをしたりまた数次の会合を重ねて樋口、岡村理事、或は工藤事務局長の来名を得て、それらの人々と協会の現況や将来の問題点について討議を十分に行った。

明けて本年いよいよ支部設置の動向は熟し、新年度の4月1日支部設立が実施され、次いで4月21日には豊口理事長並に白石副理事長その他の役員方の来名、或は当地方の有力な来賓を迎え、それに従来からの会員及新会員の参加により、国際ホテルに於て支部発会式を盛大に挙行了。

然しながら中部地区には、従来本協

会の事業に関連する潜在的会員若しくは企業は多数にのぼり、支部設立の基盤は十分に醸成されていたのにもかかわらずその運びには至らなかったのであるが、またこれを翻ってみるとき、家具木工の製造、合板類の作成、或はインテリアの素材的産業は多大であるにしても、それらを集約して現在謂うところのインテリアデザインによって空間的設計に纏めあげる面は、建築或は車両或は航空機、船舶など幾多の優れた分野を有しながら、それらの有機的関連性に欠けていたことは認めざるを得ない。

またそれぞれ分野のインテリアデザインを担当をするデザイナーは、決して少ない数ではないと考えられるけれども、今までかつてそれらの人々が具体的にどのような活動を行い、またどのような仕事をしているのかは明かではない。

また建築関係を主体とするデザイナーにしても、実際の活動面から見れば限定をされるけれども、今般の支部設立に当っては、その中の第一線の人々の参加を得たことは甚だ幸であつた。

以上は支部設立の経過と中部に於けるインテリア関係の現況であるがようやく当協会としても中部に一つの足がかりを得たことによって、今後積極的な活動を展開していきたい。

まずそれには既定の事業の推進の確実な実施は当然なことであるが、同時に当地区の特殊性をもつ未開拓分野の車両、船舶、航空機等の関係のインテリアデザインに関する各面の開拓やそのデザイナーの当協会への参加、或は各種メーカーなどの賛助会員として入会の勧誘などが予定されるところである。その他直ちに実施することは困難にしても、地方的な立場からいえば、中部各地に於てインテリアデザインの

効用性などの講演会或はインテリア資材の研究会、家政学的方向に於ける住居学とインテリアデザインの問題などそのテーマは多い。理事長によれば、ステップバイステップの形で進めたい意向のようであるが、然し所謂鉄は熱いうちに鍛えるという喩えは、やはりここにも適用可能なことばであろう。

当支部に於ける今年度の事業を次に挙げて擧筆したい。

中部支部46年度事業計画内容

(1) 第1回研究会(6月5日)

テーマ:「アメリカのインテリアデザイン事情解説及新しい室内パースの描き方」講師:春日井雅子氏(米国ロスアンゼルス) Chaix & Jonson Associates 専属プロジェクト・デザイナー)

(2) 第2回研究会(7月21日)

テーマ:「F・R・P利用デザイン研究会」講師:渡辺優氏(J・I・D理事、渡辺優デザイン事務所主宰) 榊原勇氏(大日本インキ化学工業(株)、建材部長)

(3) 「ヤマギワ照明相談」(9月以降毎土曜日) 担当:当支部正会員

(4) 「ニッポン・グッド・デザイン・ショー'71」へ出品(10月8日~13日) <於>愛知県産業貿易館 (出品者) 正会員 その他

(5) 特別講演会(10月上旬)

テーマ:「都市と空間」講師(名工大 服部千之氏予定)

(6) 見学会:建材工場(11月下旬)

(7) インテリア・ゼミナール (47年2月)

テーマ:「インテリアデザインにおける内装材と火災防止の問題について」講師:関係官庁及デザイナー各分野より夫々お招きする予定。

(8) 第3回研究会(47年3月)

テーマ:「照明デザインについて」講師:多田美波氏予定

教育の場から

協会が協会員に負うべきメリットは、総体的なものとして考えられねばならないわけであるが、各協会員が協会に期待するものは、会員の立場によってちがいがあろうと考えられる。そこで我々は教育機関に属するものとしての立場で協会に期待するところを述べてみたい。

デザイン教育ないしはデザイナーを育てる教育は学校といわれる場では完成されえないものである。学生を樹にたとえるならば、杉の樹も松の樹も檜もケヤキもあるわけで、それぞれの樹はそれぞれの種をもっているわけである。松は杉になりえないしケヤキは檜になりえない。素質といわれるものであろう。彼らが学校という機関に所属するのは大体2～4年間位であり、この短い期間では、それぞれがなんの樹の種であるかを見定めて、デザイン分野という土壌に適しているかどうかを判断し、その芽を無事に発芽させるのがせいっぱいである。彼らが太木に育つまでの土壌は実際に仕事をする職場である。

それはデザイン事務所であったり、メーカーであったりするわけであるが、とにかく学校という苗床以外の場である。もちろん彼らがプロのデザイナーとなるからには素質にはじまって不断の研鑽を積み重ねば太木になりえない。枝をのばし、根をはるのは樹自身にほかならない。しかし土壌が地味豊かであるかないかは、太木を育てても枯らしもするであろう。協会員がその地位を高めようとするには、自らの研鑽もさることながら、よりよい後輩を育成し、総体的なデザイナーの質的向上をはかることが必要ではなからうか。教育機関に属するという立場での協会への期待といえば、学生を積極的に教

育の完成へと指導して頂ける現場に送り込むルートを持ち得ることであり協会がそのルートであると同時に豊かな土壌の開墾者でありたいということである。

つぎに、学生が協会をどう受け止めているかを2・3記しておきたい。

- (1) 優秀な仕事の実績をもつ、インテリアデザイナーの集団であり、当然、社会的な発言力を持ち、そこでの決定が、日本のインテリア・デザイン界をリードして行く存在である。
- (2) インテリア・デザイナーが常時、連絡を取り合い、情報の交換を行なっている。また、事務局などから新しい材料や技術などの情報が伝達され、協会員であれば様々な特典が与えられる。たとえば照明器具、家具の購入、材料の入手など大巾な便宜を与えられ又、各種の資料の入手などは容易である。
- (3) 自分も将来インテリアデザイナー協会に入りたい。その中で情報のというのは高度なものであり、自分にとって非常にプラスになるだろうし、協会員であることによって社会的に大きなメリットがあると考えから。

などという意見が圧倒的に多い学生の考え方である。彼等は日常の生活がデザインという言葉の中に埋没しているためか、デザイン万能であり、デザイナーという職種も社会的に高い評価をうけ、尊敬されているなどと単純に思い込み勝ちであり、インテリアデザイナー協会などは当然日本中の人がしている組織であり、その組織に属するという事は、各方面へ発展する強力な手がかりとなり、協会員であるという事自体が大きなメリットになるのだと考えているわけである。以上が学生が考える協会であり、協会への期待である。

私たちも会員になって、もう2年程たつわけだが、会員になる以前に感じ

ていた協会の持つ魅力はこれらの学生達が持っていたイメージと非常に似ていたと思う。しかし、現状、2年間の私たちは会費を納入し、ニュースを送付される以上の関係にはなりえなかった。私達ちの関り合い方が積極的ではなかった点もあるが、積極的になれなかった部分もあったようである。

協会として、次に育って来て欲しい人材のために、どんなことを願っているのか、インテリアデザイン界はどの方向へ進んで行きたいのかなど、外部への働きかけがどんな形でなされて来たのだろうか。

協会の存在というのはその部分に何かの形で関係を持つか、インテリアデザインに積極的に興味を持つ、ごく少数の人たちにしか認められていないのではないだろうか。

インテリアを学ぶ学生はデザインの中で生活をし、デザインは強力であり、何でもできる様なイメージを持っている。実務でのデザイナーは、そんなに強力なものでもないし、全能なものでもない。

しかし、協会のイメージが強いものとなり、社会的な発言力を強くすることにより、次の人材を受け入れ、更に発展して行く形態も取り得るのではないだろうか。教育の場から言えば、卒業した学生たちが、彼等の能力を充分に展開出来るような場をつくるために、協会がその持てる機能を充分に発揮することが、我々には一番大きなメリットとなるのではないだろうか。

企業内デザイナーから

インテリアデザイナー協会は、法人化されてすでに3年目を迎えた今日、インテリアデザイナー協会のメリットはなにか。デパート、小売店サイドから見た場合のメリットは何か、現在、

私の所属しているデザインセクションは外商部（インテリアデザイン及び注文家具全般）と不特定の需要家を対象としたプロパー商品の開発のふたつのジャンルに分かれております。このふたつのジャンルはいずれも商業ベースでデザインをする場合が多く、今一度素直な気持でインテリアデザインとは何かと考えた場合、どうしても企業体の中に居ると企業の影響を受け易く、その影響を受けない様に自分自身に自覚をもってデザイン活動することが大切だと思う。

では実際に仕事をする上において、インテリアデザイナー協会の〇〇よりも△△会社の〇〇の方がデザイン関係の人を別に考えた場合は、クライアントに対して△△会社の方が通じる点が大きいようです。なぜならば、それだけインテリアデザイナー協会が対外的にアピールの不足に原因があると思います。フリーの事務所の場合、メーカー側行政関係、教育関係等のジャンルによってメリットの捉え方はおのずと違ってくると思います。ひとつの企業の中に居るからといって企業を通して、インテリアデザイナー協会から受けるメリットは具体的にはあまりない………といった恐縮ですが、当インテリアデザイナー協会の片棒をかつぐ一個人として考えた場合はメリットとしてさまざまな角度から論議しお互に理解と確認、密度の高い交流などから物質的あるいはなんらかの方法でメリットとしてのね返りがあると思います。

しかし、どれだけの会員が実際にあるいは目に見えないメリットかもしれないがどの様な受け取り方をしているだろうか。新しいメリットの探求について会員相互の社会的地位の向上、職能団体としての確立を目標に、協会のもつ現状の姿勢や将来への展望をどう発展させるかが、お互いに結集された共同意識をもって協会に参加し本気で

思考しなければならないひとつの転換期に差ししかかっているのではないだろうか。

約300名の会員全部がメリットだけを求めているとは思いませんが、会員がどれだけの共感をもって魅力ある協会とし、ゼネレーションの関係なく若い会員グループが自発的に何か行動し自分自身でメリットを探し求め、協会の運営に参加してゆくこと。

そして、インテリアデザイナー協会の社会性にもつながり対外的なアピールもできれば、何んらかの方法で必ずやメリットの先取ができる協会になってゆく。今や、インテリアデザイナー協会の存在価値が高められ、もうひとつのメリットが生まれる様な協会にしなければならないであろう。

企業内スタッフデザイナーから

企業内でのデザイナーの位置は、企業のデザインへの関心が高まるテンポと歩調を合わせ、すでに多くの企業で当初単純で消極的な形状の変化、改良からやがては全製品のデザイン、それを通じて企業イメージの統一に至るまでの幅広い“デザイン”を行い、製品（もの）をとりまく市場調査、販売計画、経済性の追求、生産技術、といった分野の問題にも発展し、もう1人のデザイナーといわれる、人間工学、機能の追求、テスト、実験、等次第に企業の製品開発のディレクターとしての広範囲な分野迄その位置を発展して来つつある。

まさにそうした意味から個々のデザイナーのクリエイティブしなければならぬ“仕事”は山積している。しかも企業がデザイナーに求める“事柄”について、あらかじめ分析し、分解し、整理されていないから更に自分自身を何らかのかたちで常にクリエイティブ

しなければならないのである。

企業は必要であり、内容の重要性を認めながらも企業間競争の激化により、コストダウンと、必要外のモデルチェンジを行い、他企業の製品とは違った新鮮な魅力を表現する手段としてリ・スタイリングを、あたかもまったく新しい“製品のデザイン”として見えるようデザイナーに求める。そうした観点から企業内のデザイナー自身をとらえて見ると、経済的背景をにぎっている企業に甘んじて、そうした要求を受けて立つ、もっとも現実的な即物的商品のデザイン（デザインといえないものかもしれない）にのみ進む傾向にならざるを得ないのである。そうした仕事はかなり現実の企業及び流通の過程では、売れるものとして重宝がられ、あたかも“売れるもの”ゆえに良いものとして錯覚しやすい。それ自体間違った考え方であるとは思わないが、少なくとも見方によれば“企業になめられた自主性に欠けた計数的なデザイナー”であるとも見える。

本来企業の新製品開発に欠かせないファクターとして、即物的な商品のデザインではなく、これらの製品の用いられる“場”に於けるミキシングされたシステム化ではないだろうか。前事についても製品のリ・スタイリングを強調するのみの方向から、単にそれだけでなくあらゆる未整理の問題を分析分解し企業デザインのポリシーを確立し、消費者に企業としてのイメージアップを計ると同時に現時点に於ける“良いもの”の意識のレベルアップを計るといった方向につみかさねるべきものでなければ、デザイナーとしての真価をうたがわれる。

元来、機械と芸術の間にデザインの必要が生まれたのである。“もの”の生産には必ず設計を必要とし、更にそこへデザインを加えることが必要として来たはずである。そうした意味から

デザイン（デザイナー）と企業とはもっとも現実的な中で常に産業に於ける位置づけを明確にして発展するべきであるし対等に共存しなければならないのである。

企業はあらゆる“もの”にデザインを必要とし求めている。デザイナーももっとも現実的な職業的位置として企業をもとめている。そうした意味では、個々のデザイナーのあらゆる分野に於ける知識と能力の拡大を養い計り、企業もデザインを更に理解し相互の明確な位置づけとともに結びつき発展されるべきと考える。我々企業内デザイナーが協会に感じる“協会のメリット”それは自からの能力の拡大を中心として、企業へのデザイン（デザイナー）の重要性をPRする活動により、産業デザインの発展とともにデザイナーの産業的位置の確立が可能になることのように思う。一分野ではあるがそうした方面について協会での積極的な働きかけが今後も大いに必要であるし“デザイナーと企業との結合”は協会の発展のためにも重要なアイテムであると思う。

フリーランス・デザイナーから

当協会は、何よりもまずインテリアデザインと一口にしている業務にたずさわる人達が集ってつくった職能団体である。それは単に情報を交換したり、会員相互の動向を流すだけの友好団体ではない。協会に入会する第一の目的は協会員であることで、自分の業務が守られると思うからに外ならない。日常は各人各様の施主や業者との交渉の中でさまざまな問題をかかえているわけであるが、個人的な立場からのみでは必ずしも正しくその業務を評価され、正当な報酬を得ている人ばかりではない。会社のスタッフとか学校

組織の中でその地位を守られているデザイナーは別として、フリーで仕事をするデザイナーはことさらであろう。

協会が社会的に発言力を持つ団体であれば、会員である個人は協会の定める規定をもとに自分の業務を正当に認めさせ、一つの明確な立場を示すことが出来るはずである。協会のメリットは何か？ 協会に何が可能か？ それは会員の業務を守ることに始まり、これにつぎるはずである。従って協会の最大の仕事は業務の契約及び報酬規定を確立し、これを各人が守ることから始まる。それ以外の事柄は、すべて、団体という性格上自然発生的に生ずる機能ではなかろうか。

協会が協会として、最も力を発揮してほしい時、それは協会員対注文者、広くは対社会に、日本医師会とまでいかなくとも、ある発言力を持ちたいものであるし、又、そこまでいかなければ、自己満足に終る単なる友好団体になりさがってしまう。

協会が真に社会的な発言力をもった団体になるためには、会員をふやし、まだ協会に入会していない、すでに社会的評価を受けているデザイナーの入会を求め、会員は互に協会の規定を守り、この規定を十分に活用するべくせねばならない。我が国に於てはデザイナーの社会的地位は、建築家といえども医師や弁護士にくらべてきわめて低い。まして日本では耳新しいインテリアデザイナーのこと故、各人が広く、どこでも正しく業務を理解され、報酬を受けるようになるまでにはまだまだ多くの時間を要するであろう。建築の分野から独立して、インテリアデザイナーが集って協会を組織し、やっと一人立ちをしたところである。インテリアデザイナーが独立した事務所を持ち、その名称をかかげて仕事が成り立つようになったのは、ほんのここ何年かにすぎないことは、我々会員のよく

知るところである。法人化された協会がこのような好機にその社会的足場をきずけるように、理事会の動向はもとより、協会の社会的な活動をより活発にし、会員の協会に対する働きかけも積極的にして、その存在を強く社会に印象づける必要があるのではなかろうか。

賛 助 会 員 紹 介

45・第6回理事会で決定した賛助会員はつぎのとおりです。

どうぞよろしくお願いいたします。

（株）東光堂書店

東京都中央区日本橋通1—5 中内ビル 電話 03—271—1966
大阪市西区京町堀2—93 京二ビル（大阪支店）電話 06—441—7704

（株）佐野紙芸インテリア事業部

亀岡工場 京都府亀岡市曾我部町犬飼馬の上1番地
電話 07712—3—0661

（株）木利屋

東京都港区新橋3—6—7
電話 03—503—1921～9
工場 埼玉県川口市青木町2—37
電話 0482—52—3618・3550

（株）高島屋東京支店設計部

東京都中央区日本橋通2—5
電話 03—211—4111（内 2157）

フランスベッド（株）

東京都渋谷区桜上水31—15
電話 0425—43—3111（内 47）

（株）大丸装工部

大阪市南区鰻谷中之町38
電話 06—252—0641

体質の改善とその前進の布石

—— 協会に何が可能か ——

このたび、今年度会報委員に新たな委員を加えて、これからの協会や会報の在り方について大いに議論を重ね、ここに「協会のメリットとは何か」との基本的なテーマをとりあげました。

それこそ、協会参加による意義は何に求めるべきか。また、求められるべきか。

また、流動する現代にあって、協会の力がデザイナー個々の社会的活動にどう関与してゆくものなのか。

また、胎動する若い世代にいかに関与を与え、同時に協会のもつ基本的姿勢の根拠を奈辺に求めてゆくのか。

今日、ハップフミフミやアットおどろく為五郎にかぎらず、流行語の意味をまじめに考えると全くわからないかバカをみることが多い。

そして、経営界に流行している言葉は、「価値感の多様化」に集約されています。たとえば、大阪科学技術センターの「転換期とは何か」という関西産業界に対するアンケート調査でも、83人中31人までが「価値感の多様化」を転換期の指標としてあげている。

（「技術と企業」1月号）しかし、その価値の受けとり方にも、ある人はGNPという価値だけでは人々が満足しなくなったとか、情報洪水の中で人々が混乱させられているとか、また道德的混乱をあげているなどいろいろとことなっています。

いずれの価値にせよ、現代の若い世代には確実に価値の見方への多様化が進行していることには、だれしも疑問をなげいてはいないのではないだろうか。

さて、国はエリートが固定化し、老朽化してゆくと必らず亡びる。が、エ

リートが存在価値とリーダーシップを否定し、大衆に迎合することのみ汲々とするような社会も、また、必らず社会的生命力を失って亡びてゆくものであるといわれます。

そして、今日では、大衆を批判することはタブーとされ、エリート否定の画一主義、大衆主義は日本社会の全ゆる分野に深く浸透してきているのです。

たとえば、教育の世界において特にいちじるしくなっており、教育の目的が、もしどんぐりの背くらべのような平均的小市民を大量生産するような次元にあるとするなら、それもよからう。

しかし、人間の能力は決して平等ではない。が、それを平均化することもよからう。

そして、協会の骨子は、激動の将来に向って底辺重視のぬるま湯のような大衆路線をひくことに万般がゆだねられているのでもなからう。ときには、柔軟に、ときには強引にその路線を確立することこそ必要なのであろう。

たとえば、規約第3条目的には、インテリアデザインの向上を図り、もって生活文化の向上と産業の発展に寄与する、と。ここには、生活文化という流動する社会に対して開かれた目をもって活動してゆく必要があります。

ここで、協会の今日の体質を知るために、つぎのような集計結果をみて下さい。

調査対象会員（正）	244名
（準）	55名
（計）	299名

この他、新入会員や調査もれなどはふくまれていません。

(1) 平均年令について

① 理事（役員のみ）	52.25才
② 正会員のみ	44.72才
③ 準会員のみ	27.90才
④ 全会員（正準とも）	36.31才

(2) 世代別にみる（正会員ののみ）

明治生まれの世代	29名	11.8%
大正生まれの世代	91名	37.3%
昭和生まれの世代	124名	50.9%

(3) 世代別にみる（正準会員とも）

明治生まれの世代	29名	9.8%
大正生まれの世代	91名	30.4%
昭和生まれの世代	179名	59.8%

(4) 年代別にみる（正会員ののみ）

60才以上	9.8%
50～59才	18.0%
40～49才	36.9%
30～39才	30.7%
20～29才	4.6%

（なお、年令計算は昭和46年6月30日現在とし、会員の生年月日によって満年令となったり数え年となったりして集計されています。）

この集計をみると、あきらかに協会の体質は転換期にきているといえよう。

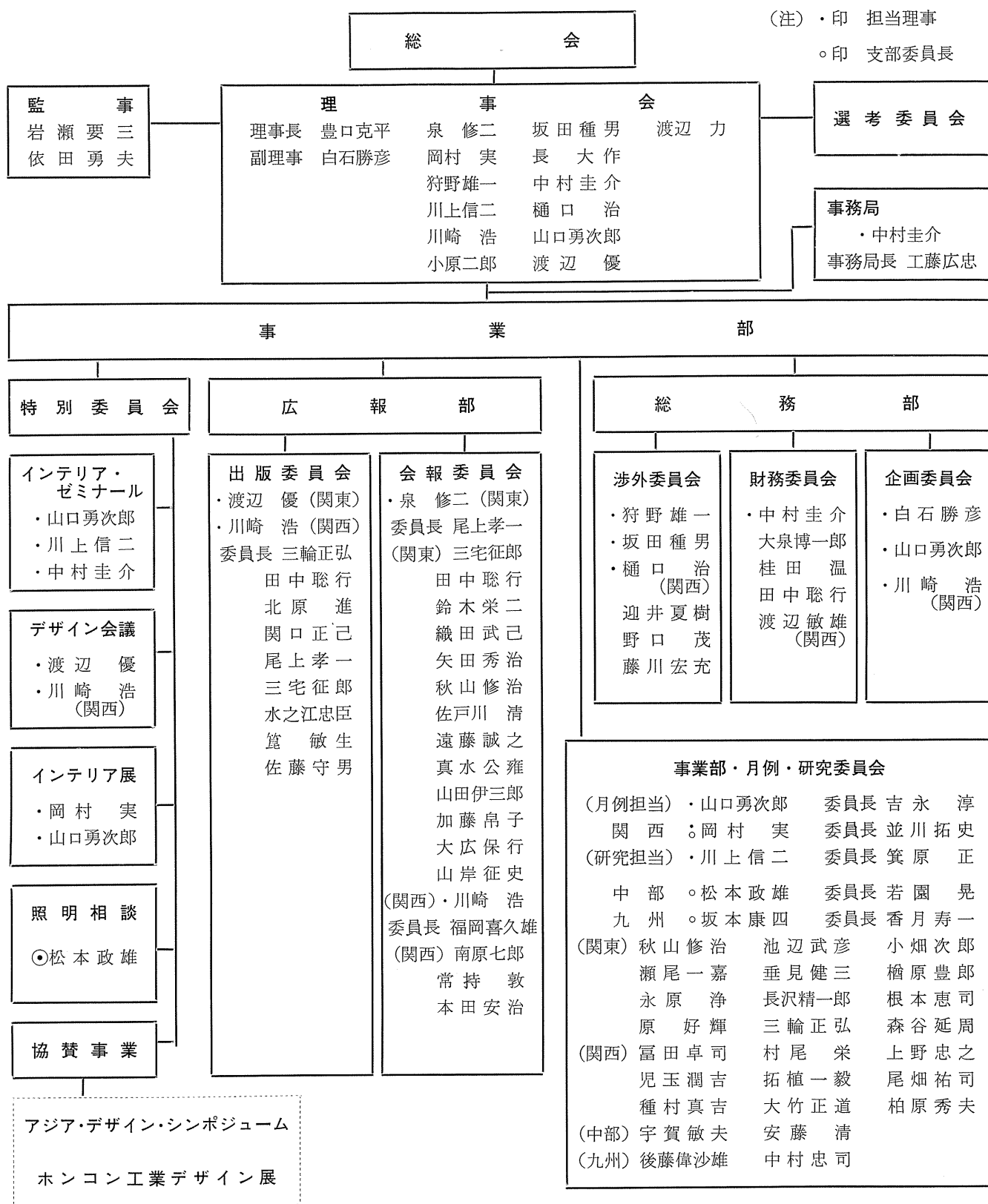
ここには、真に挫折する経験ももないまま、全くの甘ったれ小僧として過してきた昭和世代が、協会員構成の約6割を構成している事実です。

これによって、ただちに協会のもつ陣痛としての世代間の断絶をも語ることができるかも知れません。しかし、ここでは次のような提言を開陳してこの小文をしめくりたい。

<提言>

1. 会の実質的な運営は、各委員会の長によって構成される実行委員会に一任する。実行委員会の議決は合議制とし、実行委員会と理事会との連絡協議は、それぞれの会の発議により開かれるものとする。
2. 会の実際の運営のために、早急に各委員会相互の情報交換や抱負などについて、各委員会の長、他一名により構成される連絡協議会を開くものとする。

（尾上孝一）



選考委員 豊口克平 渡辺 力 狩野雄一 白石勝彦
長 大作 樋口 治 岡村 実 中村圭介
山口勇次郎 渡辺 優

(昭和46年7月1日 開票結果 順不同)

新 入 会 員 紹 介

正会員 いしただあき 石田忠昭

金沢市立工美術工芸大学工芸科昭和32年3月卒業、石川県工業試験場勤務の傍ら石川県インテリア産業協会の理事である。推せん者によれば業界の指導歴も長く熱意のある人で作品も適当と認められるとのこと。

勤務先 金沢市米泉町4-133
電話 金沢 (0762) 41-5101
自 宅 金沢市光ガ丘2-131
電話 金沢 (0762) 45-8420

正会員 こまつりょういち 小松 曉一

金沢市立美術工芸大学油画科昭和28年3月卒業、金沢美術工芸大学に勤務され教育に関係された期間も長く、研究・作品も適当と認められるとのこと。

勤務先 金沢市出羽町3-1
電話 金沢 (0762) 62-3531
自 宅 金沢市泉野町3-4-12
電話 金沢 (0762) 41-0461

正会員 みやさかひろゆき 宮坂博文

昭和19年、横浜専門学校を卒業、かって通産省繊維工業試験所において織物試験などの基礎的な技術研究をされたが、のち、インテリアファブリックのデザイン技術を通じての幅広い活動の中に国際賞受賞の経験もあるベテランでいられる。勤務先岡谷ゴブラン工芸織物(株)である。

勤務先 岡谷市加茂町3-2-21
電話 岡谷 (02662) 2-3142
自 宅 岡谷市東銀座2-8-22
電話 岡谷 (02662) 2-2981

正会員 はしもとべんじ 橋本勉二

昭和35年金沢市立美術工芸大学産業美術学科卒業、工業デザインを専攻された。氏はアルミニウムを使ってのデザインの経験が深く、アルミ材のイン

テリアエレメントとしての多くの可能性を引き出される事が期待されています。勤務先はホクセイアルミニウム(株)東京デザイン室です。

勤務先 東京都中央区八丁堀2丁目27-10 東八重洲ビル9F
電話 東京 (03) 552-3291(代)
自 宅 千葉県松戸市総台579-1
電話 松戸 (0473) 61-2393

正会員 ひらい みつる 平井美蔓

京都工芸繊維大学意匠科昭和32年卒業、豊かな感受性に裏付けされた合理性は、真摯な説得力と相俟って納得できる作品を度々産みだしておられ、デザイン密度の高さと生真面目ともいえる製作管理の態度は立派なものです。一との紹介者の弁です。最近フリーになられて住居も東京へ移されました。

前勤務先(株)日建設計大阪事務所
自 宅 東京都清瀬市旭ヶ丘団地2-3-6-108
電話 清瀬 (0424) 91-9118

正会員 かつせそういち 勝瀬壮一

昭和6年、東京高等工芸学校工芸図案科卒業、長期間にわたり産業界に活動し、造形深い専門的知識がこれからのインテリア業界に大きく貢献されるであろうと大きく期待されており、また、テキスタイルデザイン関係の開発、活動に大いに役立たれるであろうと推せん者の弁です。ミネスタジオを経営されています。

事業場 東京都杉並区高井戸東2-25-25
自 宅 東京 (03) 333-6019

準会員 かわの あきら 川野 明

昭和45年3月桑沢デザイン研究所卒業のほか、東京デザイナー学院、カロ

インテリアなどを卒業、実際面での仕事も数多く手がけていられ、その作品も期待できる方であるとのこと勤務先は(株)ミツマルです。

勤務先 平塚市桃浜町6-12号
電話 平塚 (0463) 32-6363
自 宅 神奈川県高座郡海老名町河原口269
電話 厚木 (0462) 31-1366

準会員 くろさわ みちお 黒沢三智夫

昭和44年3月、武蔵野美術大学産業デザイン科卒業、工芸、工業デザインを専攻された方で、化学素材メーカーのデザイン開発部門の中堅デザイナーとして地道な活動をつづけておられます。勤務先は興国化学工業デザイン室でプロダクティブファニチャーのデザインおよび素材の商品化にとりくんでおられます。

勤務先 新宿区大京町22
電話 東京 (03) 341-5111
自 宅 東京都杉並区成田東1-30-6 興国化学寮
電話 東京 (03) 313-6973

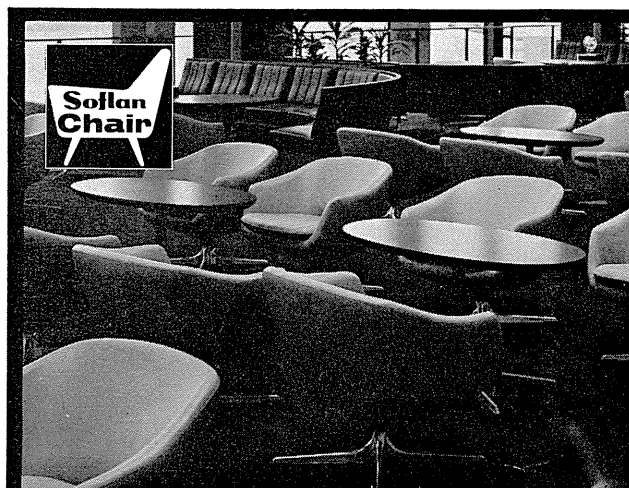
準会員 ばば さとし 馬場 敏

昭和46年3月武蔵野美術大学産業デザイン科卒業、インテリアデザインを専攻され、三菱開発(株)住宅部へ勤務、これからの住環境のデザインにとり組んでいる、熱心な新進デザイナーであるとの推せん者の言葉です。

勤務先 東京都千代田区丸ノ内2-4-1
電話 東京 (03) 214-6731
自 宅 東京都武蔵野市吉祥寺南町4-24-6
電話 武蔵三鷹 (0422) 44-6731

会員動静

古藤司郎氏 1971年8月15日から明年7・8月頃迄社用によりニューヨークに出張在勤されます。



アイディアを生かせる トヨ・ソフランチェア

ソフランチェアは特許のモールド製法で、設計図そのままの美しい曲線で、同型を短期間に量産できます。スチール骨組をソフランで完全内包し全体がクッションでモダンリビングに最適です。会議室・ロビー・テラス用など、有名設計事務所の御引立も頂いております。



ウレタン化学の総合メーカー
東洋ゴム工業株式会社／化成品事業部
〒550 大阪市西区江戸堀上通 2-5 (06)441-8801

●ソフランオール寝装品／洋ふとん・肌ふとん・ソフランケット・マットレス・カーペット・婚礼組夜具

日本の誇る世界のクッション材

ウエビング

世界の需要は年々急速な増加を示しております。
之がため生産設備の機械化に努力し、単一品質の大量生産に成功しました。

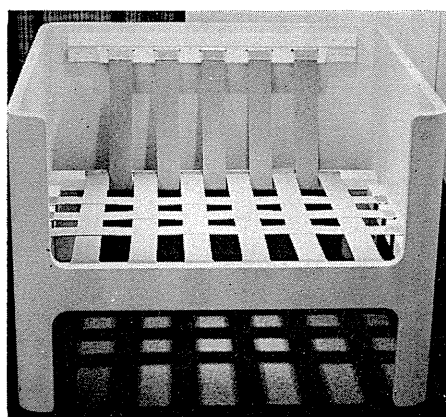
現在生産量の92%が世界32ヶ国に輸出されています。

輸出貢献企業



富国株式会社

東京都中央区日本橋小伝馬町 2-2 電話 (662) 1901 (代表)
支店出張所 サンフランシスコ・ブリスベン



雷が4日もつづいて体制はガタガタ、協会の事務局にもクーラーが必要でしょう。こういう時期は暖かく迎えられるよりも、冷たい処遇をうける方がどんなにうれしいことか。明治神宮の緑はサワヤカといっても視覚的なものでは実質的メリットにはならない様です。協会も、いろいろと、頑張らなくっちゃ、ですね。(遠藤・真水)

■ 編集後記 ■

新年度、フレッシュ委員をむかえて協会のけん引車よろしくの意気盛ん。テーマも大きく、望みも高く、新しい起爆剤ではないが、一種の清涼飲料剤にならんと。少数意見も楽し、はたまた、造反有理のことばも楽し。(尾上)

盲人、蛇におじず、こわいもの知らずの発想は、外めには見ちゃいられない事もあるでしょうが、たまには新しい発見があるのでないかと、ひそかに期待して会報委になりました。(加藤)
協会員平均年令36.31才、会報委員平均年令以下。暖房完備の事務所で委員一同ハッスル、協会のメリットは何か、全員原稿持参 (織田)

機関誌・J I D・Vol 8 No.49.50 定価 120 円
昭和46年 8 月発行 印刷 広洋印刷(株)
発行所 社団法人日本インテリアデザイナー協会
東京都渋谷区神宮前1-14-34 森ビル
(☎150) 電話 (03)403-6647

発行人 豊口克平
会報委員会(関東)委員長
・泉 修二
・川崎 浩

(関西)委員長

編集 社団法人 日本インテリアデザイナー協会
尾上孝一 (委員) 三宅征郎・田中聡行・鈴木栄二
織田武己・矢田秀治・秋山修治・佐戸川清・遠藤誠之
真水公雅・山田伊三郎・加藤昴子・大広保行・山岸征史
福岡喜久雄(委員) 南原七郎・常持 敦・本田安治